

川原寺寺域北限の調査

—第19-5次

1 はじめに

本調査は、史跡川原寺跡における、奈良県風致保全課による園地広場建設にともなう発掘調査である。調査地は川原寺の寺域北部にあたり、伽藍地の北西から北に延びる丘陵の東裾に位置する。近年まで畑地として利用されていたが、公有化後に荒地と化したため、古都保存事業による園地広場建設が立案され、建設計画の資料を得る目的で発掘調査を実施した。

調査にあたって東西約5 m、南北約50 mの調査区を設定し、のちに一部を拡張して合計434 m²を調査した。調査は2003年2月14日に開始し、7月31日に完了した。

2 検出遺構

調査区の基本層序は、上から耕土、床土、中世の包含層(灰褐色土、黄灰色砂土)、奈良時代の整地層(炭混暗褐色土、炭混暗灰色土)、川原寺創建期の整地層(炭混黄褐色土)である。さらにその下層には7世紀前半から古墳時代にかけての整地層が重なる。

検出した遺構のうち、中心となるのは川原寺創建期～奈良時代で、冶金関連工房や瓦窯、鉄釜鑄造土坑、北面大垣、掘立柱建物群などがある。平安時代以後の遺構の数は少なく、小規模な掘立柱建物が存在する程度である。そのほか、川原寺創建以前の7世紀代の遺構や、古墳時代の遺構の一部を確認した(図24)。

川原寺創建期～奈良時代の遺構

冶金関連工房 調査区南部では、奈良時代の整地層である炭混暗灰色土の一部を掘り下げ、冶金関連工房の具体的様相を確認した。工房は、浸水を防ぐため丘陵裾に「コ」字状に排水溝を設け、同時にその溝で作業面を区画している。この区画溝に囲まれた作業面上に炉が設置される。3条の区画溝SD602・603・605に囲まれる3つの区画を検出したが、同様の区画はさらに南北に連続すると予想される。工房の東は飛鳥川に向かって急激に落ち込み、そこに炭・灰・焼土などが堆積する。

また調査区中央部にも、炉が丘陵裾に沿って散在する。調査区北部には、北西の丘陵上から排出された炭層が堆

積しており、多量の冶金関連遺物が出土した。創建期の冶金関連工房は、調査区周辺一帯に展開すると思われる。

検出した炉は33基を数え、その多くは狭い範囲に数基が重複して設置されている。炉はほとんど底部が残るのみで、全容がわかるものは少ない。このうち調査区中央の東端で検出した炉SX625は最も残りが良く、外径65 cm、内径25 cm、深さ8 cmと規模が大きい。鞆羽口挿入孔が十字形に配される形状が特徴的である。中心は楕形に窪んでおり、炉底部を貼り直して再使用している。

区画溝SD602・605は、埋土に多量の炭が含まれており、溝内からは埴塙・鞆羽口・砥石・鉄滓などが出土した。また角礫が多数落ち込んでおり、SD605の一部には護岸した状態で残っていた。このほか、SD603に重複して、冶金関連遺物が一括廃棄された土坑SK609があり、鑄型・埴塙・鞆羽口が出土した。

瓦窯 調査区中央の西端で、瓦窯SY595の焚口部を検出した。窯体の大部分は調査区外西側の丘陵斜面に存在する。丘陵裾を「八」字状に掘削して前庭部をつくり、約10°の傾斜で地山を削りこんで幅2.2mの焚口部をつくる。前庭部には灰原が広がる。灰原は、冶金関連工房の炭層より下層に位置するので、SY595は創建期に操業したと考えられる。

焚口部の上層にあたる、SY595埋没後の整地層からは熔着瓦の塊が出土した。また、SY595の北東には焼損瓦を廃棄した瓦溜りSX594がある。しかし、両者からは平城宮土器Ⅲに比定できる土器が出土している。したがって、奈良時代にSB588・590の建設にともない周辺一帯を整地した際、SY595に由来する焼損瓦を一括して再廃棄したと推定される。

鉄釜鑄造土坑 調査区南部で、大型の鑄造土坑SX599を検出した(図25)。径2.8mの隅丸方形の土坑で、現状の深さは40 cmだが、削平を受けており、本来はこれ以上に深さがあったと考えられる。

土坑内部には、鑄型がほぼ鑄造時の原位置に残存しており、形状からみて鑄をもつ鉄釜(羽釜)の鑄型と判断した。鑄型は、羽釜の口縁を下にした形で据え付けられ、鑄から上の部分の外型が残っていた。鑄造製品を復原すると、口径38 cm、高さ推定30 cm前後で、胴部の上方には幅8 cm、厚さ2 cmの鑄がとりつき、鑄の表面に2条、口縁上部に1条の凸線が巡る。鑄型の南側と北側は、製品

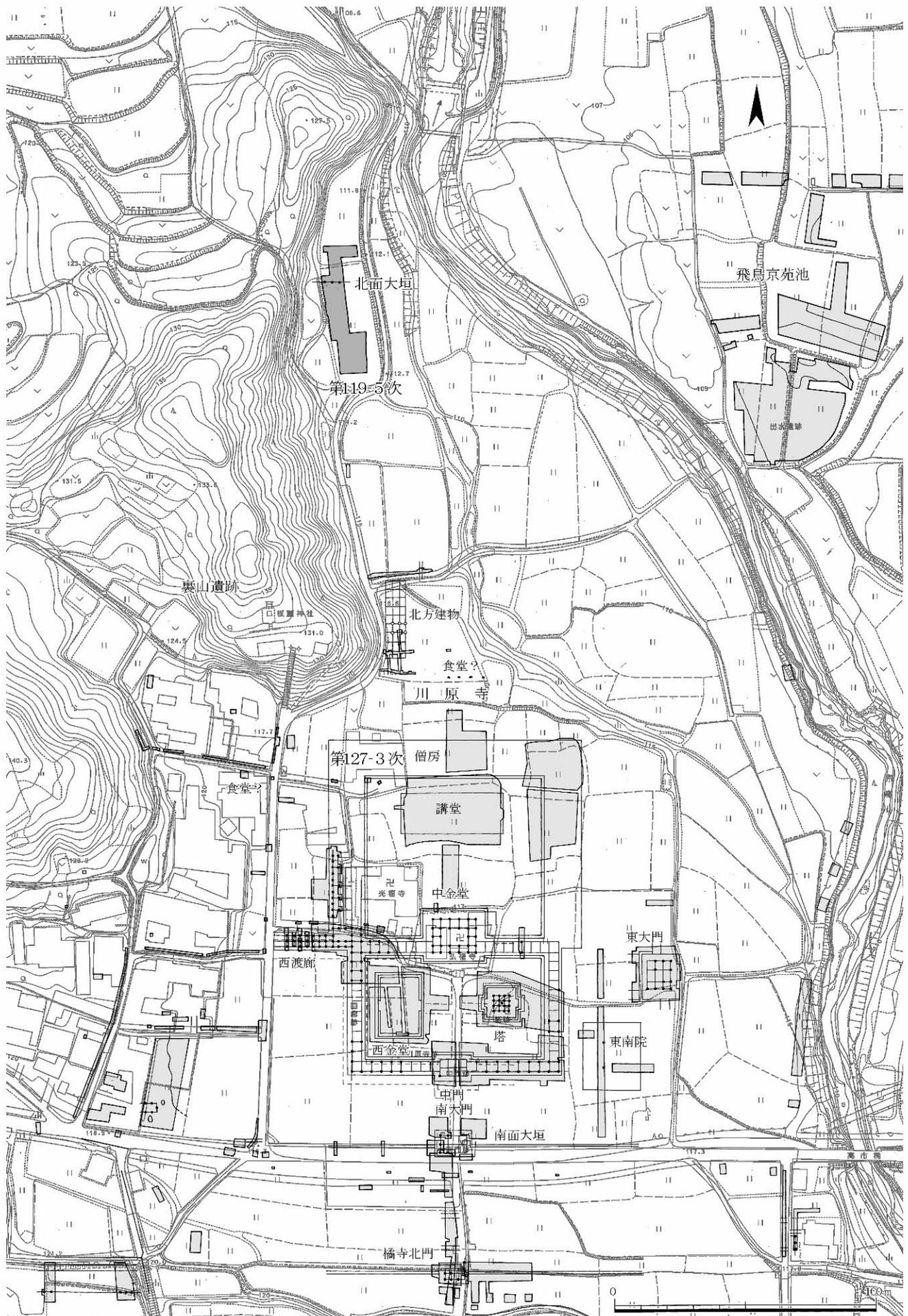


図23 第19-5・127-3調査位置図 1:2000

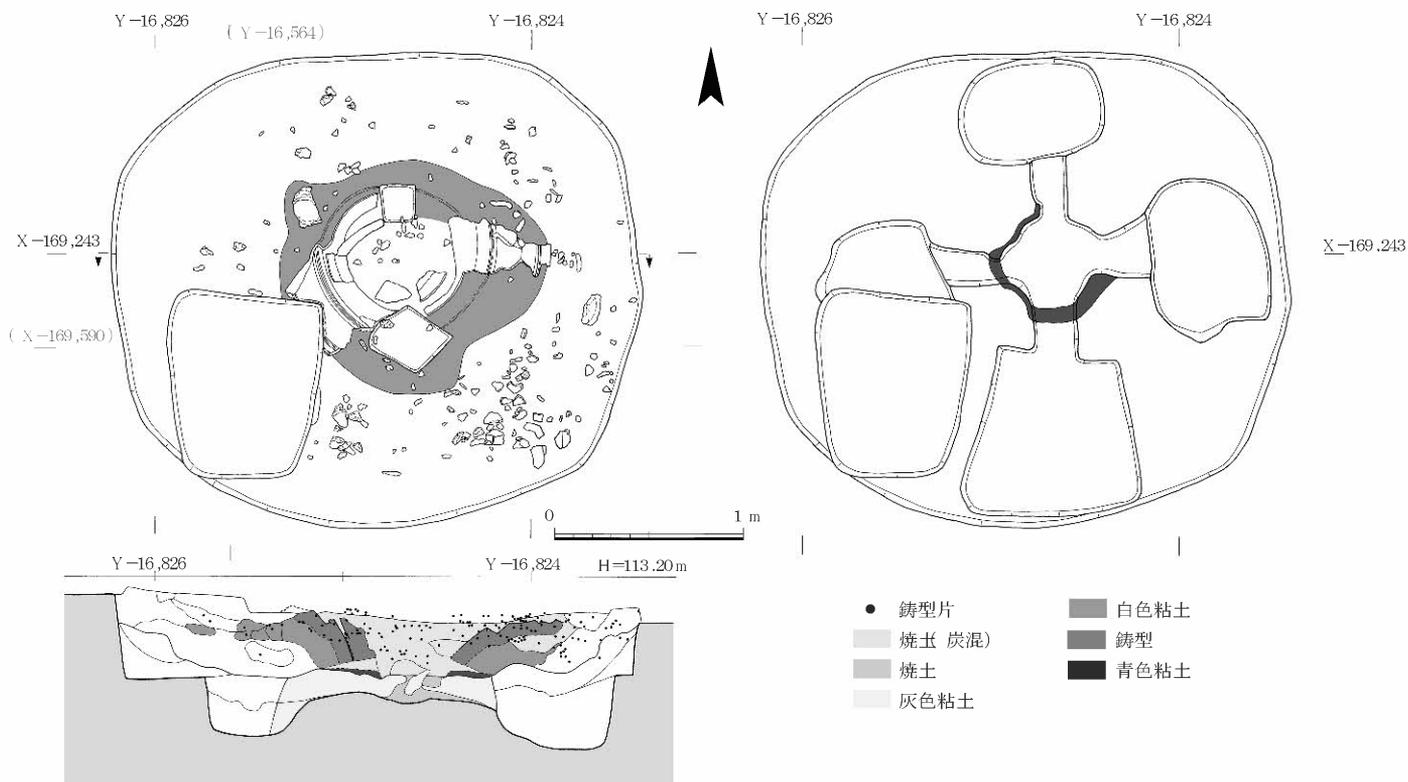


図25 铸造土坑S X599 铸型出土状況(左)、基礎構造(右) 1:40

SA600の北側には、石積SX596とそれともなう石敷SX597がある。SX596は、南北4 m以上にわたり、人頭大の川原石を3段に積み、土留めとする。東側には拳大の礫がややまばらに敷かれる。SX596は、奈良時代の建物SB590の西側柱筋の延長上に位置するので、両者は同時期と考えられる。

掘立柱建物 調査区中央部～南部で、創建期の冶金関連工房を埋めた整地層(炭混暗灰色土)上に5棟の建物があり、またそれに先行する塀を検出した。最も古い建物からSA592→SB591→SB588・SB590→SB587→SB586の順に変遷する。

SB590は、桁行2間(5.1m)×梁行2間(4.8m)の総柱建物2棟が棟通りを揃えて並んでおり、二つの倉が並び建ち連結部をもつ双倉形式の建物に復原できる。中央間は2.7mで、桁行総長5間(13.5m)。柱掘形は一辺0.8m。この棟通りが南に位置するSB588の西側柱筋と揃うので、両者は併存したと考えられる。SB588は、桁行4間(9.6m)×梁行2間(4.8m)の南北棟で、柱掘形は一辺0.8m。SB588廃絶後にSB587、SB586が建てられる。SB587は桁行3間(4.5m)×梁行2間(3.6m)の東西棟で、柱間が狭く、規模がやや小さい。SB586は桁行3間以上×梁行2間(4.8m)の東西棟で、東側は調査区外に続く。掘立柱建物群の中で最も新しい。奈良時代末頃～平安時代初頃の炉SX624を囲む形で建つので、工房の覆屋である可能性がある。

その他の時代の遺構

調査区の北部で、北西の丘陵上から排出された炭層の下で、土器溜りSX650と下層石敷SX639を確認した。両者から、瓦や冶金関連遺物は出土していないので、川原寺創建以前の遺構と考えられよう。SX650は、炭層の直下で、4 m四方の範囲に土器片が大量に密集していた。土器のほとんどが摩滅した細片で、ほかに遺物をまじえない。SX639は、炭層より約30 cm下に位置する。丘陵裾に石組溝をつくり、その東に拳大の円礫を敷き詰めている。規模は、SX650とほぼ重なる位置で南北8 m、東西2 m以上が確認でき、東側は調査区外まで広がる。出土土器から7世紀前半頃の遺構と考えられる。

また調査区の南端で、古墳時代の遺構の一部を確認した。SD640は幅0.8mの素堀の南北溝であり、その下層には円形土坑SK641がある。両者から土器が大量に出土した。土器は完形に近く復原できるものが多い。また、それとともに滑石製模造品・白玉が100点以上出土しており、これらの遺構・遺物は祭祀に関わる可能性がある。

3 出土遺物

冶金関連遺物など 冶金関連遺物には铸型・坩堝・轆羽口・砥石・鉄製品・銅製品・銀片・鉄滓・銅滓などがあり、ほかにガラス小玉铸型、ガラス片、玳瑁片、漆塊がある。冶金関連遺物は、調査区全域から出土した。全容が確認できるものは、坩堝40点以上、轆羽口70点以上、砥石60点以上あり、鉄滓は100 kg近くある。(富永里菜)

表16 第19-5次調査出土瓦磚類集計

軒丸瓦		軒平瓦		その他		
型式	点数	型式	点数	種別	点数	
601 C	16	651	A	1	切り面戸瓦	1
608	7		B	2	切り熨斗瓦	1
621	2		B ₁	1	隅切瓦	1
645	3		B ₃	2	文字瓦	1
701	1		B ₄	2	へら描き丸瓦	3
715	1		C	1	へら描き平瓦	4
716	1		D	6	磚仏	1
721	1	652	1	磚	6	
不明	2	783	2	土管	3	
合計	34	合計	18			

瓦磚類 川原寺創建から平安時代の瓦磚類が大量に出土した(表16)。軒丸瓦8型式32点と型式不明が2点、軒平瓦3型式9種8点が出土した。軒丸瓦601C・608・621・645(鬼面紋)は創建期、701・715・716・721は平安時代である。軒平瓦651・652は創建期、783は平安時代である。奈良時代の軒瓦は出土していない。丸・平瓦は、丸瓦2,528点(386.62kg)、平瓦13,123点(1,767.73kg)が出土した。両者とも創建期のものと平安時代のものに数量が集中している。(小谷徳彦・笥和也)

土器類 弥生時代から中世の土器類があるが、多くは古墳時代と7世紀代のものである。工房区画溝には、土師器杯C・杯H・蓋・高杯・鉢・鍋・甕・竈、須恵器杯G・杯H・同蓋・高杯・壺C・甕などがあり、飛鳥IからIIIまでの土器を含む。ほかに、被熱土器や漆付着土器がある。鉄釜製造関係遺構SX599・SK598には、土師器杯A・B、須恵器杯B・同蓋などがあり、飛鳥Vに比定できる。土器溜りSX650には土師器杯H・杯X・高杯・盤・鍋、ロクロ土師器、須恵器杯H・同蓋・杯G・同蓋・盤蓋などがある。蓋の数量が身に比べ多く、煮沸具や貯蔵具は僅少であるという特異な器種構成であるため、編年の位置づけは困難だが、飛鳥Iに属するであろう。古墳時代の遺構SD640・SK641からは土師器、ロクロ土師器、須恵器、韓式系土器、製塩土器が出土し、須恵器は多くが陶邑編年TK23～TK47に比定できる。(飛田恵美子)

4 まとめ

本調査によって、川原寺の北面大垣を初めて確認し、寺域の南北長がほぼ3町であることが判明した。これは持統・文武朝の四大寺のうち飛鳥寺の寺域南北長(294m)とほぼ同規模であり、川原寺が大寺にふさわしい寺

域をもつことを確認できた。

また、北面大垣に接する寺域北部に工房関係遺構が展開する状況が明らかになった。工房の操業期間は7世紀後半の創建期から平安時代に及ぶ。工房では、鉄・銅・銀などの金属加工を行っており、また同時に、瓦、ガラス製品、漆塗製品などの生産を行っている。この工房は、川原寺寺域内に営まれ、操業時期が川原寺の造営や消長と密接に連動するところから、川原寺の造営や営繕のために設置された寺院工房と考えられる。

奈良時代の資財帳や縁起などの文献史料により、古代寺院の寺域内には大衆院、倉垣院、花苑院、修理院などの諸施設が配置されていた様子が知られる。今回、川原寺の寺域北端で工房関係遺構を確認したことにより、古代寺院の空間利用の一端を解明することができた。

また鑄造土坑SX599は、これまでに類例のない古代の鉄釜の鑄造土坑であり、大型の鑄造遺構としても最古の資料である。鉄釜に関しては、12～14世紀の伝世品があるほか、現在のところ出土品でも古代に遡る例はない。また鑄造遺構としては、8世紀頃から各地で梵鐘鑄造土坑がつくられるが、本遺構のようなガス抜き構造や鑄型の固定方法を採るものはほかにみられず、特徴的である。古代の鉄釜の形状や、製作技術を解明する上で貴重な資料といえる。

古代寺院は、法隆寺や大安寺の資財帳にみるように、数多くの鉄釜を所蔵し、温室(湯屋)の湯わかしや食物調理に使用していた。川原寺における鉄釜の使用法については、今後さらなる検討が必要となろう。

なお、本調査の詳細については、別途刊行した調査報告書『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第19-5次発掘調査報告』(2004年3月)を参照されたい。(富永)